

巻 頭 言

牧 草 談 義

蔵 知 毅

秋を迎えて本号は特に草の特集号とした。各方面の草の専門家の御寄稿を頂いて、この様な特集号ができたことを感謝します。

ところで岡山県の牧草改良も近年著しい進歩を見せ、全国的にも有名な県になってしまった。そのお陰で毎年F・A・Oの牧草専門家を迎え、その助言を得ることが出来ることを幸いに思っている。それ等の助言が1つ1つ活かされて、今日どれほど牧野改良に役立っているか判らない。これ等の専門家にもやはりお国自慢と云うか、自分の国が最上であると言う意識があつて、改良の方法にも、採り上げる牧草の品種にも、各々特徴が出て面白い。この様な専門の人々の研究を聞いていると、つくづく考えさせられることは牧草試験場の設置の必要性である。先進国では広く世界各地から牧草の種子を集め、それ等の栽培試験を行なつて、自国に最も適した牧草を数種選定して、それを全国に普及しているのだから、一般農家は指導通りに牧草改良をやれば、立派な牧場ができるわけである。ところが我が国ではこの様な試験研究機関がないので、牧草は勝手に栽培されているため、失敗が多いのであるから、1日も早く立派な牧草試験を設置してほしいものである。

最近麦作転換が喧ましくなり、麦の代わりに裏作に牧草を作るようになって来たが、考えさせられることは牧草なり、飼料作物の商品化の問題である。アメリカのカリフォルニアでは肉牛牧場も、市乳牧場も殆んど牧草の栽培地を持たず、附近の農家と契約して、年間の必要飼料を栽培させ、切って持ち込んで幾らと云うようにしている。従つて牧草なり、飼料作物を専門に作つても農家経営が成り立つのである。我が国でも将来この様な農家ができ、酪農家として契約を栽培したり、乾草を作つて販売するようになったら、麦を作るよりはるかに有利になる筈である。売れる牧草を作ることを奨励することも、これからの大きな課題ではないだろうか。そのため

に優秀な乾燥機等も大いに研究したいものである。

これからの畜産の1つの大きな課題は、如何にして農家の草に対する認識を改めさせ、草を農業経営に採り入れさせるかと云うことである。草を取る農業から、草を作る農業に転換させることが必要なのではないだろうか。そのために時間をかけてP・Rをしなければならない。

日本人の通弊は草の週間のように運動をしている時は一心にやっているが、運動週間が終るとすぐ忘れてしまうことである。草の運動の様に長年月を要するものは、もっと気長に、機会ある毎に大いに啓蒙運動をやりたいものである。

その意味で本号が広く活用されることを祈つて止まない。